

岩谷学園テクノビジネス横浜保育専門学校

令和5年度 学校関係者評価委員会報告書
(評価対象期間：令和4年4月～令和5年3月)

1 学校関係者評価委員会実施要項

開催日	2023年6月1日
開催場所	岩谷学園6号館 (対面とビデオ会議システムのハイブリッド)
参加者	【学校関係者評価委員】 田岡芳和 神奈川県立大和南高等学校 鈴木克彦 株式会社応用ソフト開発 洪心路 東洋大学 赤松龍男 株式会社グランドワン 【教職員】 上田保志 校長 薛陽芬 学科長 (経営マネジメント科・情報ビジネス科 ・日本語研究科) 新宿恵 学科長 (日本語科) 青木英幸 学科長 (保育士養成科)
評価対象	経営マネジメント科・情報ビジネス科・日本語研究科 日本語科・保育士養成科
配布・公開資料	学校自己点検・自己評価表 令和4年度学校事業概要

- 校長挨拶
- 委員紹介
委員の出席および委員会成立を確認

2 令和4(2022)年度の学校事業概要報告

学校行事について	
	【経営マネジメント科・情報ビジネス科・日本語研究科】 ・新入生研修(4/21～22)

- ・就職研修・2年生 (5/24)
- ・校外学習 (9/3)
- ・校内スピーチコンテスト (10/19)
- ・秋季研修旅行・2年生 (11/10～11)
- ・就職準備研修・1年生 (12/6)
- ・スポーツ大会 (12/13)
- ・卒業制作発表会 (2/13)

【日本語科】

- ・春季校外学習 (7/27)
- ・防災授業 (12/5)
- ・秋季校外学習 (12/6)
- ・関東甲信越地区日本語教育機関連絡協議会主催弁論大会 (1/26)
- ・神奈川専修学校各種学校協会横浜支部主催スピーチコンテスト (2/1)
- ・日本文化体験授業 (書道等) (1月・クラスごとに実施)
- ・校内スピーチコンテスト (2/8)
- ・全国専門学校日本語教育協会主催弁論大会 (2/10)

【保育士養成科】

- ・東濱祭 (9/3)
- ・成果発表会 (12/15)

教育交流事業について

教育交流：

教育実習生受入 (日本語科)

学習院大学より実習生受入

インターンシップ生受入 (日本語科)

コロナ禍の影響により中止

高校連携授業 (保育士養成科)

県内高校生受入

校内交流授業 (日本語科・保育士養成科)

母国教育・家族事情紹介

企業連携：

就職面接研修：企業参画あり

卒業制作発表会⇒コロナ禍の影響により企業参画なし

	<p>インターンシップ：</p> <p>保育実習（保育士養成科）⇒例年通り実施</p> <p>各企業（経理ビジネス科・情報ビジネス科）⇒例年通り実施</p>
外部表彰について	
	<p>【経営マネジメント科】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・全国経理教育協会高瀬賞 <p>【情報ビジネス科】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・神奈川県専修学校各種学校協会会長賞 <p>【日本語研究科】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・全国専門学校日本語教育協会 優秀学生表彰 <p>【日本語科】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・該当なし <p>【保育士養成科】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・全国保育士養成協議会 会長表彰
取得資格	
	<p>【経営マネジメント科】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・全経簿記検定 <ul style="list-style-type: none"> 3級 31名（41名中） 2級 商業簿記 27名（45名中） 2級 工業簿記 45名（45名中） ・日商簿記検定 <ul style="list-style-type: none"> 3級 6名 ※希望者のみ受験 2級 2名 ※希望者のみ受験 ・Microsoft Office Specialist <ul style="list-style-type: none"> Word2013 45名（45名中） Excel2013 45名（45名中） <p>【情報ビジネス科】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・Web クリエイター能力認定試験スタンダード 38名（44名中） ・Access ビジネスデータベース技能認定試験 3級 26名（44名中） ・Java プログラミング能力認定試験 3級 14名（44名中） <p>【日本語科】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・日本語能力試験（JLPT） <ul style="list-style-type: none"> N1 1名 N2 20名

	<p>N3 27名</p> <p>【保育士養成科】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・保育士資格 21名 (21名中) ・幼稚園教諭 6名 (短大併修希望者のみ)
--	---

3 基準項目ごとの学校関係者評価・意見等

令和4年(2022年)度の自己点検評価報告をもとに、基準項目ごとに学校から説明がなされ、評価を行った。

	主項目	評価
1	教育理念・目標	<p>学科ごとに目標とする人材像を定め、教育活動に取り組んでいる。</p> <p>また、特色のある教育活動に取り組んでいる。</p> <p>自己評価で課題として挙げているように、社会の変化に応じ、「時代に合った教育」について考え、変えるべきでないところと変えていけるところ、変えるべきところを見極め、進化・深化を続けて欲しい。</p>
2	学校運営	<p>学園が掲げる「建学の精神」は、学園内全ての部門に浸透しており、理事長⇒部門長⇒現場に事業計画が流れ、それに基づき、年間スケジュールを作成している。また、「目標管理シート」と学園が読んでいる事業目標達成のための管理シートを活用し、その推進にあたっている。</p> <p>2022年度の特徴として、特に日本語科においてコロナ禍で激減した学生数から、一気に入国してきた学生の増加に体制が追い付かず、人員不足を感じる教員が多かったようである。</p> <p>2023年度から生活指導員の増員を含め、人員増加に取り組んでいるとのこと。その成果が出ることを期待したい。</p> <p>固定資産、備品等の購入時の決裁フローや台帳管理は制度化されており、情報公開(シラバスや自己評価、学校関係者評価委員会など)もHPで閲覧可としている。</p>

		基本運営に問題はないと言える。
3	教育活動	<p>各学科それぞれに工夫を凝らし、学生の進路実現のための教育を行っている。シラバスにて各科目の到達目標を明確に示し、その到達目標に向けて実践的な授業に取り組んでいる。PA（パフォーマンスアセスメント）表を導入し、単に学習能力の向上だけでなく、社会人としての自立に向けて養うべき特質にも注意を向けた教育を行っていることは、独自性、内容として評価できる。</p> <p>現場教員からは、自身のスキルアップのための研修参加の機会を増やすことや学園で実施している研修内容の充実化を希望している。学園としても研修の機会を設けているようだが、教員のスキルアップのためのサポートを考えても良いのでは？</p>
4	学修成果	<p>在学中に目標としている資格の取得、卒業後の進路実現の実績は良好である。</p> <p>コロナ禍で就職の決まらない学生(特に留学生)に対しても、特定活動の在留資格取得の支援、継続的な就職支援を実施しており、評価できる。</p> <p>学習成果の外部への発信が課題になっている。企業に参画いただいている行事もあるようだが、その機会を増やすことや新たなスキームを考えることもできるだろう。</p> <p>卒業生のキャリア形成、社会的活躍の把握は大きな課題として認識しており、校友会組織の改編に取り組んでいる。</p>
5	学生支援	<p>在校生に対しては、相応しい支援がなされている。</p> <p>「ハートアンドハード」をキャッチコピーに、面倒見の良い学生フォローの姿勢が代々受け継がれており、厳しく、内容の濃い授業を展開しつつ、難しさを感じる学生へのフォローも怠っていない。</p> <p>欠席者へのフォローや、定期面談、必要に応じた面談など、対学生の為の時間をしっかり取っている。</p> <p>退学者が前年度より増えている部門もあるが、在学中に就職が決まり、在留資格を変更しての退学や、本人の健康状態、母国家族の事情による退学がほとんどで、学業不振、十分なフォローなくフェイドアウトしてしまった学生の数は多くないことを確認した。</p>

		<p>コロナ禍での経済的な支援として、学費の分納、延納を制度として設け、また個別対応もしている。</p> <p>一昨年度課題として取り上げられた留学生の在留期間更新（留学ビザの延長）の不許可による退学は、2021年度に続き、2022年度も不許可ゼロとなり、良い状態を継続している。</p>
6	教育環境	<p>昨年度のCの評価から一つ評価を上げている。</p> <p>とはいえ、ICT教育のための教育環境としては不十分、PCの数やスペックが、現場教員からは満足のいくものではないようである。</p> <p>部門ごとにPCの新規購入によるマシンの入替え、学生用サーバーの交換などを行い、教育環境の改善を行った。</p> <p>新年度が始まり、まだ安定していないようだが、情報系学科もある専門学校ゆえ、スムーズにPCが動く環境は必須であろう。</p> <p>各号館、照明や壁紙の交換、壁塗りなど、できることを進めている点は評価できる。</p> <p>2022年度内に予定していた、PCのSSD換装計画は遅れたとのこと。授業進行がスムーズに行えるインターネット環境、PCの整備は重要度が高いため、是非進めて欲しい。</p>
7	学生の受け入れ募集	<p>2021年度は、コロナの影響が日本語科に最も強く出た。国際的な往来が止まったことにより入国予定者の入国が叶わず、1年間新規入国がなかった。</p> <p>そのため、2022年度の2年生は1名のみ（国内入学者のみ）となっているとのこと。</p> <p>学校としては如何ともし難い状況であるが、受入募集および財務に大きな影響が出るのは必至である。</p> <p>日本語学校への入学者が減ることで専門課程への入学者も大幅減が予想され、専門課程も2022年度入学者の確保が大きな課題であったが、入学定員の約63%の入学者を迎えることができ、2年生を含めると約76%の定員充足率とのこと。コロナ禍としては健闘していると言える。</p> <p>また、新たな取り組みとして、「在日外国人特待奨学生」の新制度をスタートした。</p>

		<p>例えば外国につながりのある高校生を受け入れ、日本のビジネスマナーや専門資格、ビジネスレベルの日本語力を習得し自信をもって社会に出るための教育を行うことを意図したものであり、評価できるポイントである。</p> <p>日本語科の、在留資格認定証明書交付申請の許可率が大幅に向上したとのこと。 学生受け入れの最初の段階として重要である。</p> <p>保育士養成科は残念ながら募集が振るわず、2022 年度入学をもって募集停止とのこと。 在校生がしっかり学び、無事に卒業できるよう最後まで学校としての責任を果たして欲しい。</p>
8	財務	<p>2022 年度から国際的な往来が再開し、滞留していた（入国を待っていた）留学生が一気に入国できたことから、日本語科の学生数が増えている。また、このタイミングで定員増も行っており、2023 年度から定員を 400 名（これまでは 320 名）としている。</p> <p>半面、専門課程では、日本語学校在籍の学生数がコロナ禍で減少した影響を受け、昨年度、今年度は入学者数が入学定員を割っている。しかしながら、6 割弱の充足率を保ち、全体としては心配ない様子。保育士養成科については今年度から募集停止とし、2024 年度からは好調な留学生部門のみでの運営となる。財務的な心配は当面はないと思われる。</p> <p>教育内容を充実させ、しっかりと募集を継続させることが重要である。</p> <p>また、2022 年度末に物価高対応支援金を一律に教職員に支給するなど、財務面で体力があることを示している。</p>
9	法令等の遵守	<p>県による現況調査への対応、高等教育修学支援新制度対象校認定、留学生部門は入管庁からの適正校認定など、専修学校設置基準の要件を満たすだけでなく、適正な運営をしていると捉えられる。</p> <p>個人情報保護のための対策を実施し、また著作権に関しても授業目的公衆送信補償制度（SARTRAS）を活用し、著作権法第 35 条の運用指針に対応している。</p> <p>また、著作権に関する研修を教員向けに実施している。</p>

10	社会貢献・地域貢献	<p>社会貢献・地域貢献としては、特に保育士養成科が積極的な取り組みを行っている。</p> <p>公共職業訓練の受託を行い、離職した社会人を対象に保育士資格の取得を支援している。</p> <p>また、県内の公立高校からの聴講生の受入れ、同じ横花市内の私学高校からの交流授業受入れなど、教育リソースを地域に還元する姿勢も見られる。</p> <p>地域のボランティア活動としては、かつて行っていた清掃ボランティア活動を始め、止まったままの状態とのこと。</p> <p>昨年度もできるところから始めよう、という話になっていたが、残念ながら進展が見られない。学校としての自己評価も低くなっているが、改善を期待したい。</p>
11	国際交流	<p>県内でも屈指の留学生受け入れをしている学校であり、受入から卒業までのスキームが確立されている。</p> <p>入管庁から適正校の認定も受けており、在籍管理も適正に行われている。</p> <p>学修成果の国外への発信の点でどんなことができそうか検討できるのではないかと。</p>

総評

伝統のある学校として、安定した運営、経営ができていると思う。2022年度の運営を振り返り気がかりに感じたことは、現場の先生が多くの業務を引き受けて何とかなっているのではないかと、ということである。人の善意に頼って何とかなる運営ではなく、仕組みで回せる体制への改善が長い目で必要と感じる。新しい取り組みをしていくためにもマンパワーは必要であり、どうしてもやることが増えてくるため、新しいことへのチャレンジのためにも仕組み作りの大切さを感じる。人が全部抱えることには限界があるだろう。コロナ明けに学生が一気に入国してきたときの対応は、近隣住民として関わらせてもらった立場から見ても、とてもたいへんだったと思う。早く常態化し、ルーティンで回せるようになって欲しいと思う。地域交流が課題だが、近隣を巻き込んだの取組みを考えるとできると思う。(例えば、近隣の主婦層にボランティアでおいでいただき、お寿司の指導など、日本文化を伝えていただくことなど)

学校としても、核となる学科が複数あるので、連携することでシナジー効果を生み出すことができると考える。今後の発展に期待したい。